

秋の日に

館
絢香

短くなった夕暮れ時

肌寒くなった風はスツと抜け

空との境目を真っ赤に染める

おそばせながらわいて出てきた入道雲が

薄紫色にそそり立ち

明日の天気うらないをする

いつの間に鳴くのが上手くなった虫たちが

この時を逃すまいと競い合う

その景色の中を急ぐように

かけていくのはあの頃の私

幼く無邪気でまっすぐで

それ故に武器も戦い方も知らない私

自分の中にあふれてしまっような何かを

なんとか必死でなくさめようと

ノートに隅に書き殴っていたあの日も

きつと今日のような夕暮れだった

ただ何も持っていないことがくやしかった

今ならわかるあの時に

満たされなかつたのはなぜなのか

幼い私を視線でなでて

風と共に抱きしめて

「そのひとつひとつがあなたの武器になるから」と

虫たちの声にまぜて言う

そして空はだんだんと

濃紺色へとぬり変わり

顔を出した星々が

いつかの希望を歌いだす